

## NHK 全国方言資料 (石川県石川郡白峰村白峰) 改定と注釈 (承前)

新田 哲夫

### 1 はじめに

前稿(「NHK全国方言資料(石川県石川郡白峰村白峰)改訂と注釈」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』No.24, pp.29-63, 2004年3月)に引き続き、日本放送協会編『全国方言資料』(以下、NHK全国方言資料)第3巻 東海・北陸篇の石川県石川郡白峰村白峰の文字化部分について改訂を行い、注釈をつける。白峰村白峰の文字化部分は、自由会話1「お盆と台風」、自由会話2「食物のはなし」、3「あいさつ」からなるが、そのうち前稿で述べることができなかった3「あいさつ」の部分を取り上げる。なお、2005年2月、白峰村、尾口村、鳥越村、吉野谷村、河内村、鶴来町、松任市、美川町が合併し白山市となり、白峰村白峰は白山市白峰となったが、本稿では原本のタイトルのまま、白峰村の名称を用いることがある。

### 2 「あいさつ」について

録音資料の後半にある「あいさつ」は、「1.朝」、「2.夕」、「3.道で」、「4.買物」、「5.送り」、「6.迎え」、「7.不祝儀」、「8.祝儀」の八つのパートからなる。話し手の山下文太郎さん(1893年生)と小田きくさん(1892年生)は、それぞれの場面設定のなかで、自由な台詞、すなわちアドリブでやりとりを繰り返している。そのやりとりは誠に自然な運びに聞こえる。

「1.朝」と「2.夕」はセットで、隣家に「かずき桶」を借りるために訪問し依頼する場面と、その「かずき桶」を返しに再度訪問し礼をいう場面である。近所で交わされるあいさつと礼の言い方のサンプルである。そこでは、「かずき桶」という特色のある道具を使って、農作業に明け暮れた一日が伺える。「3.道で」は、焼き畑耕作のためにヤマ(山地)で暮らす「季節出作り」から久しぶりにジゲ(村)に出てきた設定で、ヤマとジゲの二重生活が描かれる。「4.買物」では酒の量り売りの様子が描かれる。「5.送り」と「6.迎え」はセットで、夫婦間の送り迎へのあいさつが描かれる。北陸地方では一般に自分の夫に対して「身内敬語」が用いられることが多いが、白峰ではそれが顕著なたちでは現れない。このテキストの夫婦間の直接会話でもほとんど敬語が現れない(また、身内敬語を外部にも用いる「絶対敬語」も白峰にはない)。そこには、サバを買ってくるように依頼する表現や苦勞をねぎらう表現も含まれる。「7.不祝儀」はその家のおばあさんが亡くなったさいの弔い、「8.祝儀」はその嫁が出産したときの祝いのあいさつである。「8.祝儀」は男の子が特別大事にされていたことが描かれる。

### 3 聞き直し作業の協力者

前稿に引き続き、聞き直しの作業にさいし、白峰生まれの竹トシエさん（1925年生）の協力を得た。また、一部の事項については加藤継満津さん（1923年生）の確認を得た。記して感謝申し上げる。本稿で「話者」というのは主に竹さんを指す。

### 4 改訂と注記の表記法など

行番号と話し手、ゴシック、下線、などの意味は前稿と同じである。今回はテキスト（本文）の頁を白抜きの p. --- で表した。行番号と話し手の性別（m/f）を[ ]で表した（例：[8m]は8行目男の会話）。行番号は方言文と共通語訳をセットで1行と数えた。筆者が改訂した方言文、共通語訳はゴシックで表した。また、筆者が確認したものと元のテキストとが異なる部分については、実線の下線を引いた。ただし、小さい違いに関しては下線を引かなかったものもある。筆者の注はポイントを落として行ごとに本文の後に付した。また、参照すべきテキスト（本文）の頁と行を123-5（125頁5行）のように表した。〈 〉の括弧は意味を表す。必要に応じて { } を形態素を示すものとして用いた。

なお本稿では、本文との異同以外、例えば筆者の強調したい部分などは二重下線を引く。

### 5 構成と詳しい注

本稿では、本体となる「あいさつ」の改訂・注釈のまえに、まず前稿の訂正と補足を述べておく（6節）。本稿の本体である改訂と訂正（7節）のあと、最後に改訂を行って考えたことを覚え書き風に短く書き記す（8節）。

前稿の補足、本稿の注釈には、やや詳しい語学的な解説が含まれる。ただし、白峰方言の体系的・網羅的な記述の途中で、現時点では決して十分なものではないが、内容理解の助けとなろう。今回取り上げる主な語学的項目は次のようなものである。

- 形容詞テ形+オル（6.2節）
- 一人称ギラ（6.2節）
- シャル形式と「要る」の尊敬形（7節 141-9）
- 理由を表わす「～デ」と「～サカイ」（7節 142-5, 146-5）
- 時を表す語（7節 142-6）
- ナー、コーの疑問語疑問文で使われるマーカー（7節 143-3, 149-4, 149-6）
- 「ケ」の存在（7節 143-6）
- アスペクト形式「～テヤ」、「～チョツチャ」（7節 143-9）
- 文末詞ザイ（7節 145-7）
- オマウ「思う」の形式（7節 148-2）
- 視点制約のないクレル（7節 148-3）

## 6 前稿の訂正と補足

### 6.1 訂正

- 前稿 29 頁-7 行：ソノシートで付きのもので→ソノシート付きのもので [タイプミス]
- 前稿 34 頁 14 行：カマシイリコの説明が不適切だった。「カマシの粉を挽いてそれを炒り、」は誤りで、「カマシの実を炒りそれを挽いて粉にし、」が正しい。
- 前稿 35 頁 4, 5 行, 63 頁 6 行：白山麓昔話→白山麓昔話集 [タイプミス]
- 前稿 41 頁-3, -4 行：「「偉い坊さんがゴザツチャッタ」など存在の動詞+ Chol も可能」としたが再調査では否定された。「ゴザツチャッタ」なら可能というが、これはゴザル+ヤッタの「基本形+ヤッタ」の形で〈いらっしゃったものだった〉という回想の意味である。
- 前稿 50 頁 10 行：「穀物の粉を炒ってお湯で溶いたもの」は「炒った穀物の粉をお湯で溶いたもの」が正しい。

### 6.2 補足

- 前稿 41 頁-8 行：127-4 ウリシテ オッタケツトニヤー

八亀裕美 (2001, 2002, 2003) では、形容詞の時間的 (局所) 限定性の重要性が示されている。白峰方言の形容詞テ形+オルの形は、ウリシテオル、サビシテオルのような時間的限定性を伴う形容詞に現れる。上記の例はタ形だが、ル形でも可能である。

今ワ サビシテオルケツトカ アシタワ 孫ガ 来テ ニギヤカニナロー  
 〈今は寂しいけれども明日は孫が来てにぎやかになるだろう〉

これらは継続相の一種で一時的な状態を表している。一方、

- \*アシコノ バーサワ ヤサシテオッタ 〈あそこの婆さんは優しかった〉
- \*校長先生ワ キビシテオッタ 〈校長先生は厳しかった〉

など人の恒常的な性質を述べる場合は非文となる。

センジチューワ ヘダルテオッタ 〈戦時中は空腹であった〉

は判断が人によってゆれる。ヘダルイ状態をその当時において一時的なものと捉えるかどうかによって判断の違いがでたものと考えられる。

また、過去に恒常的な状態があり、時間がたつて結果的にその状態が解消されていても、テオル形は用いられない。

- \*昔ワ 車オ 運転スルヒトワ スクノテオッタ 〈少なかった〉

形容詞だけでなく名詞の場合も並行的である。

去年一年間ワ 役員デオッタ

今日ワ ベツピンサンデオツチャ 〈別嬪さんでいるんだ〉(お稚児さんの孫に)

状態の主体が人でない場合もオルが用いられる。アルを用いると非文になる。

サッキマデ 天気ガ ヨーテオッタケツトカ 雨ガ降ッテキタ 〈天気が良かったけれど〉

- \*サッキマデ 天気ガ ヨーテアツタケツトカ 雨ガ降ッテキタ 〈天気が良かったけれど〉

なお、「ヨイ」のテ形+オルは、ヨイニオルやヨーシテオル、ヨイニシテオルの形 (〜シ

テは形式上動詞テ形)もある。これらの形式は全ての形容詞に備わるものではない。

サッキマデ 天気ガ ヨイニシテオッタケツカ 雨ガ降ッテキタ

なお、本稿で取り上げるテキストでは、152-7 オノコガ ウマレテ ウリシテ オリマスワ  
ノーでこの形のル形が現れる。

●前稿 42 頁 10 行：127-6 ツクリワ セーヨー デカイ ナルシー

ツクリ〈農作物の出来〉という動詞連用形由来の名詞はかなり古くから用いられていた  
ようだ。近世後期の古文書にもみえる。「桑もよく出来いたし作りもあしからず由ニ候得ば  
…」(杉原亀十郎家古文書 嘉永二年 杖邑地内持分地見帳『白峰村史下』1959年 p.693),  
「作りは上ノ出来実入よろしき所なるよし…」(同 p.698)。

●前稿 43 頁 4 行：127-10 ホンノニ ヨイ ナッテ コメガ

この本文を「ホンノニ ヨイニ ナッテ コメガ」と訂正し、注釈に「ヨイニは「良い」の  
副詞的用法、ナッテは補助動詞ではなく、「生って(実って)」の本動詞であろう」とした  
が、この「ヨイニ ナッテ コメガ」は〈良く実って, 米が〉ではなく、前行の 127-9 ホン  
ノニ コノ トーカホド テンキガ ヨーテの〈本当にこの十日ほど天気が良くて〉の部分  
を繰り返そうとして、〈良くなって〉の意味を言った可能性も捨てきれない。というのは、ヨ  
イのナル形はヨールもあるが、この方言ではヨイナルの形式が普通であるからである。  
『白山麓昔話集』p.96に「奥方は、この薬をのむと、病気は薄紙をはいで行くように良い  
になって行って」とある。これと類似のナル形はナイ〈無い〉でもみられ、このナル形は  
ナシナル(ナシンナル)である。本稿 140-4 の注、150-10 ナシンナリマシテを参照。

●前稿 45 頁 21 行：129-6 マ ギララ (ン) トッサラ トシガ

注釈では「ギラは1人称「私」のこと」とだけ述べた。この語源については不明だったが  
が、真田信治(2005:117)では、『日本国語大辞典』(小学館)に見出し語のある「ゲラ」  
がギラにつながるものであることが述べられている。真田(2005)が引いている用例は、  
浅井了意、万治二(1659)年の筆といわれる『東海道名所記』六、「父(たあ)も母(う  
も)も京へ出たにゃあ、我(げら)も出てにゃあ。」(『日本古典全集 假名草紙集 下』1962,  
朝日新聞社, p.268)であるが、その後の部分をみると、このことばを発したのは、身な  
りがあやしい京都の八瀬(やせ)の男であることがわかる。また、『西澤文庫 皇都午睡』三  
編中(1850)に、「又男を八瀬の外良(ゲラ)と唱へて皆惣髪にて鬘も結わず髻(モト  
リ)をくゝりて巻立公卿方の冠同前にて…」(『新群書類従 第一』1906, 国書刊行会, p.706)  
とあるのも、八瀬の例である。

白峰のギラと音が類似したゲラが、八瀬で用いられたことはすでに岩井隆盛(1962:443)  
で指摘があり、氏はそこで両方言の言語年代学的な推定を行っている。ただ、岩井(1962)  
が示す他の語彙をみると、白峰と八瀬が偶然以上の一致をみせているとはいえない。加賀  
白山麓の白峰と京都洛北の八瀬に、なぜギラ・ゲラの関連語が存在するのかは疑問のまま  
である。

『日本国語大辞典』で早い例として引かれている大蔵虎明本狂言・麻生の「げらが宿を忘れて、はやし物をしてくる」は、八瀬の例かどうかは不明だが、間抜けな下人の藤六、下六自身のことを指している。いずれも身分の低い者に対して用いられた語のようだ。語源については『日本国語大辞典』は「げらう（下郎）の転か」としているが、語末尾の *rau* の対応が合わないのが気かりである。

一方、筆者は『方言文法全国地図』第1集13図「おれの」の項目に記録されている「ゲー」（奈良県吉野郡下北山村寺垣内、話者は1925年、1905年生の二人の男性、古い語形という注記あり）にも注目したい。このゲーは藤原与一『日本語方言辞書 中巻』p.188にも奈良県吉野郡東部方言として記載されている。ある時代に\**ge* ないし\**gi*（長母音だった可能性もあり）の自称詞があり、*ora* や *ura* と共通の接辞\**ra* が付いて白峰のギラのもとができたのではないかと考える。八瀬のゲラもその仲間と見なされ、「下郎（下藤）」との直接の関係は疑う必要があると考える。

●前稿 50 頁 1 行 : 132-3 テノウラ カエシタヨーナ

前稿で「テノウラ返す」は慣用句で身体語彙はテノヒラと書いたが、これは現代の話者のことであって、当時の話し手 *m*（山下文太郎さん）に同じ使い分けがあったとは限らない。『小学館古語大辞典』には「明年の秋のころ必ず崩御なるべし。その後、世間手の裏返すごとくなるべし」（保元物語、上、法皇熊野御参詣）の例が引いてあり、一方、見出し語に「てのひら」はない。「手の裏」の方が歴史的に古い用例をもつようだ。

●前稿 50 頁 6 行 : 132-4 イリコヤラ

本文注 2)に「麦こがし。大麦を炒ってひいた粉。」とあるが、白峰ではカマシ（シコクビエ）という穀物の実を炒って粉にしたものをさす。白峰では麦は生産されず常用に食されてはいなかった。

●前稿 50 頁 12 行 : 132-5 イーヤラ

本文注 3)にイーは「ヒエの実と皮をまぜてむしたもの」とあるが、イーには、脱穀のあとの精白実ヒエノミだけの飯と、ひえの実と皮が混ざったヒキヌギの飯があった。さらに、ヒキヌギの口当たりをよくするために、ヒキヌギを臼で搗いたツクビエがあり、それを炊いたものも食された。ヒエノミだけのイーと比べ、ヒキヌギやツクビエのイーの方が下級である。ヒキヌギないしツクビエの調理法は、あらかじめよく混ぜておいたものを炊いて、七八割方水分が無くなったところで、ゴロギヤという木製杓子でよく混ぜて均等にしながら蒸し上げる。本文注 3)の説明はこの過程をさしている（この項、橋礼吉『白山麓の焼畑農耕』1995:434-435を参照した）。

●前稿 50 頁 12 行 : 132-6 アノ (ン) イワシヤニャー (シャンジャワイ) ニッシンカ

前稿でイワシは糠漬けの塩イワシのことと書いたが、生イワシの可能性もある。確かに糠漬けのコンカイワシは常用の食べ物だった。しかし、橋礼吉(1995:482)によると、5月に自家でコンカイワシを漬けるさいに、薄く塩漬けされた生イワシが白峰に到着し、それ

を年一番のご馳走として食べたい。ここでのイワシはこのときのイワシをさしている可能性もある。

●前稿 50 頁-10 行 : 132-7, 133-2 ガッコーエ デル

前稿で「学校に行く」の意味であると述べたが、補足が必要である。白峰方言では、方向格の格助詞はエがもつぱら使われ、到着点を表すニとの対立は厳密に守られる。したがって、「学校へ出る」の「出る」は「会合へ出る」と同じで〈出席する〉の意味である。「学校に(へ)行く」意味で「出る」を使用するのは、白峰では一般的で、別の話者の織田スエさん(1912年生)の談話の中でも現れたのを確認している。

●前稿 52 頁 15 行 : 133-10 イッショニ ツェーテ クーヤッタジャ

本文注 6)に「一升にふやして」の意。」とあるが、前稿で、文字化部分・訳とも「イッショニ ツイテ クーヤッタジャ〈いっしょに搗いて食べたものだった〉」に訂正した。これは上記 132-5 イーの注釈で述べた、ヒエの「ツクビエ」のことをさしている。これを炊くと「ヒキヌギ」よりは口当たりが少しよくなった。

●前稿 53 頁 1, 5 行 : 134-3,4 ナンジャ ヌカラ ヒツモ トラント クーヤッタニヤ

ここでのヌカはヒエの“ヌカ”だが、これは米の「糠」に相当する物ではなく、ヒエの内穎(えい)・外穎をさし、米の「籾殻」に該当するものである。これを特にゴキヌカといった。米の糠に相当するものはヒエノメという(橘礼吉 1995:434)。ヒエノミ(精白米にあたる)だけの飯ではなく、ヒエノメ、ゴキヌカを混ぜて(搗いて)いっしょに食べたことをさしている。

●前稿 54 頁 19 行 : 135-3 カマシバッカナ イリコオ

イリコの代表はカマシ(シコクビエ)を炒って挽いたものである。お湯を入れて溶いて食べる。カマシにヒエやアワを混ぜるものもあった(前稿ではソバを混ぜる例だけをあげた)。カマシイリコは橘礼吉(1995:461)にあるように「淡泊で癖のない味」で、筆者も食したが多くの人に好まれる味であるのを実感した。

## 7 本文改訂と注釈

### p. 140

#### あいさつ

#### ◆1 朝

[1m] マイド アリガト ゴザッテノー

マイド アリガト ゴザッテノー

毎度 ありがとう ございます。

いつも ありがとう ございます。

アリガト ゴザッテノー:感謝のことばではなく、訪問したときの決まり文句。「マイド アリガトゴザッテノー」のあと、「サイサイ〜」、「コナイダモ〜」と応答する。「アリガト〜」のあとは「ゴザッテ

(ノー)」のテ形の言い切りであることに注目したい。これは「アリガトゴザル」の状態が継続していることを示す。(いつも有難くて(思っておりますが…))の気持ちか。ノーは丁寧な文末詞。一方、礼をいうときには、アリガトゴザイマシテのようにマスのテ形もあるが、アリガトゴザイマシタ(ワイ)、アリガトゴザイマス(ワイ)のように、タ形ヤル形で言い切る場合が多い。退出するときはアリガトゴザイマシタと礼をいうのが丁寧である。この場合もタ形の言い切りである。文末詞ワイは自分の言いたいことを一方的に述べる場合に使われる文末詞。128-3 サンジャワイ(そうなんだよ)、129-7 ジャーデモ ジャンマイワイ(どうでもかなわないよ)、131-7 ソレオ タノシミニ シツチョチャワイ、142-9 タノミマスワイノーなど。また、アリガトゴザイマス(ゴザイマシタ)ワイなどの礼にも使われる。

[2f] アイ ナンデ ゴザリマッスヤロー

アイ ナンデ ゴザリマスヤロー

はい。何(の用)で ございましょう。

はい。なんで ございましょう。

[3m] アノー キョーワ イェーハン アノ コヤシ ダソート オモタラ

アノー キョーワ イエワ アノ コヤシ ダソート オモタラ

きょうは 奥さん、 しもごえを 出そうと 思ったら

あの 今日は (自分の)いえでは こやしを 出そうと 思ったら

イエーハン:奥さんのことをイエーハンということはない。ここではイエワあるいはイエアといっている。

意味は〈自分の家では〉。

[4m] カズキオケガ ノーテ モシ アイチョツタラ カシテ

カズキオケガ ノーテ モシ アイチョツタラ カシテ

かつぎ桶が なくて、もし あいていたら 貸して

かずき桶が なくて、もし あいていたら 貸して

ノーテ:ナイ(無い)の活用はナイ、ナカッタ、ナケリヤ、ノーテ等。ナル形はノーナルの形もあるが、ナシニナル(ナシンナル)が普通。この形式のナル形をもつ形容詞は他にはヨイ(良い)がある(例:ヨイニナル)。

カズキオケ:水や肥を運ぶための桶。ニナイボー(天秤棒)で運ぶ桶ではなく、背中に担ぐ運搬専用の桶。リュックサックのように紐が渡してあり、背中にフィットするように楕円の形をしている。側面の縁が高くなっており、上体を横に傾けて担いだまま据え置きに注ぐことができる。「桶」を単独でいうとオーケと長音が出るが、複合語後部に現れるこの例ではオケの短音で出ている。一方、複合語前部要素では「おうけだいこ(桶太鼓)」の語が見える(『白山麓昔話集』p.22)。

[5m] クダハランカト モテー

クダハランカト モテー

くださらないかと 思って…。

くださらないかと 思って…。

クダハランカト：クダサランカトがもと。s>hの変化。

モテー：しばしば、オモタ（思った）、オモテ（思っ）の語頭音が落ちることがある。

[6f] イクラデモ アイチョリマスシヤ モツテイッテ ツコーテ

イクラデモ アイチョリマスヤ モツテイッテ ツコーテ

いくらでも あいておりますよ 持って行って 使って

いくらでも あいていますから 持って行って 使って

イクラデモ：これは文構造上、モツテイッテ ツコーテにかかる。

アイチョリマスシヤ：アイチョリマスヤと言っている。動詞+チョリ（アスペクト）+マス（丁寧）+ヤの語順。ヤは共通語のノダにあたり、マスの後につく。共通語ノダの丁寧形にノデスがあるが、白峰方言のヤには丁寧形はない。共通語で「～ています」と「～ているのです」の関係が、白峰方言では～チョリマスと～チョリマスヤとなり、ヤの有無のちがいとなる。

[7m] クダハイマセ

クダハイマセ

くださいませ。

くださいませ。

マセ：現在の白峰方言ではあまり聞かない言い方という。

[8f] ソリヤ ウリツシヤ ドコニ ゴザツチャロノー

ソリヤ ウリツシヤ ドコニ ゴザツチャロノー

それは ありがたい どこに あるでしょうか。

それは うれしいことだ。どこに あるんでしょうか。

ウリシヤ：〈嬉しい〉にあたるウリシ+ヤ。

ゴザツチャロ：ゴザル+ヤロ。{ヤロ}はルのあとで/チャロ/。ここでのゴザルは「ある」の丁寧語。

[9f] ウチノ コヤノ ウシロニ アリマスジャガ

ウチノ コヤノ ウシロニ アリマスジャガ

うちの 物置小屋の 裏に ありますよ。

うちの 小屋の 後ろに あるんですけど。

ウチノ：イエは所属する家庭や家族・親族をさす人間関係の категорияであるのに対して、ウチは建造物をさす。140-3のイエと比較されたい。『日本言語地図』第4集 191 図「いえ（家屋）」では、福井県嶺南地方、滋賀県、三重県以西はイエ、飛んで東北以北にもまとまったイエの分布があり、それに挿まれるように日本列島中央部にウチが分布する ABA 型の様子を見せている。白峰方言は ABA 分布の B の範囲に入る。

アリマスジャガ：140-6のアイチョリマスヤと同様ジャはマスのあとに続く。ガは自己の言いたいことをストレートに述べるワイに比べ、相手に配慮して遠慮がちに述べるときに用いる。

- [1m] ア ソーカヨー (アーン) ア スナラ イマ ソツカラ  
 ア ソーカヨー (アーン) ア ソナラ ギラ ソツカラ  
 ああ そうですか。(ええ。) あ それなら いま そこから  
 ああ そうですか。(ええ。) あ それなら 私が そこから

ソーカヨー：ヨーは敬意を含んだ文末詞。例えば 144-1 ヘット ヤスンデイカッシャレヨー。また、ヨーシタイ〈ありがとう〉にも付き、ヨーシタイヨーのようにもなる。ジャンカヨー〈そうですか〉のようにカヨーの結びつきでもよく用いる。アサイクワシャッタカヨー〈朝ご飯召し上がりましたか〉の朝のあいさつにも現れる。

- [2m] カッテイキマシヨワイノー  
 カッテ イキマシヨカイノー  
 借りていきますよ。  
 借りていきましょうかね。

カッテ：「借りる」はカル、カッタ、カッテの西日本一般の形をとる。

ワイノー：ここでは、カイノーと言っている。ワイは自分が言いたい事柄を一方向的に述べるもので、これから「かずき桶」を借りていこうとする伺いの立場からは避けたい表現であるという。

- [3f] モッテイッテ ツコーテ クダハイマセ  
 モッテイッテ ツコーテ クダハイマセ  
 持って行って 使って くださいませ。  
 持って行って 使って くださいませ。

マセ：現在の白峰方言ではあまり聞かない言い方という。140-7 参照。

- [4m] ア ソリヤ ウリッシャ アリガト ゴザリマスー ジャンカ  
 ア ソリヤ ウリッシャ アリガト ゴザリマスー ジャンカ  
 それは ありがたい。ありがとう ございます。どうか  
 あ それは うれしいことだ。ありがとう ございます。どうか

ジャンカ：〈どうか〉。指示詞ド系「どう」は、例えば、ジャンシテ、ジャーナ、ジャーデモなど、ジャンとジャーの両形式をもつ。

- [5m] タノムマスー  
 タノンマスー  
 お願いします。  
 頼みます。

タノムマス：タノンマスとっているが、このときのンは syllabic な  $m$ 。

## ◆2 タ

- [6m] キョーワ ダイジノ カズキオケオ カリマシテ アリガト  
 キョーワ ダイジノ カズキオケオ カリマシテ アリガト  
 きょうは 大事な かつぎ桶を 借りまして ありがとう

きょうは 大事な かずき桶を 借りまして ありがとう

カズキオケオ：この文節末に北陸の間投イントネーションのような音調が聞こえる。ただし、他ではいっさい見られないことから、これが慣用的に用いられた確率は低い。

ダイジノ：ナ形容詞と名詞+ノの区分が共通語と異なるものがある。チョコットナ〈少しの〉など。前稿 p.54, 135・3 を参照。

- [7m] ゴザイマシテワイ  
 ゴザイマシテワイ  
 ございましたよ。  
 ございました。

ゴザイマシテワイ：ワイは自分の言いたいことをストレートに述べる場合に使われる文末詞。礼を述べるときにも用いられる。

- [8f] イクラデモ ツコーテ クダハイマセー (アー)  
 イクラデモ ツコーテ クダハイマセー (アー)  
 いくらでも 使って くださいませ。(はい。)  
 (これからも)いくらでも 使って くださいませ。(はい。)

- [9f] イラツシャランジャ モー スンダイノー  
 イラツシャランジャ モー スンダイノー  
 いらないんですか。もう すんだんですか。  
 お要りではないんですか。もう すんだのか。

イラツシャランジャ：ここでのイルは〈要る〉で、その否定はイラン。「要ル」にシャル形の尊敬イラツシャルがある。アノ人ニ 金ガ イラツシャルといえる。否定の要ランの尊敬形は並行的にイラツシャラン。標準語では「要る」の尊敬形はオ要リニナルや、オ要リニナラナイの分析的な形式をとるが、この方言ではシャル敬語(～シャル、～サツシャル)を用いた統合的な形式が可能である。そもそもこの方言では、動詞に関わる敬語形式としては、通常シャル敬語しか持たないため、動作・変化動詞や状態動詞等の動詞の語彙的な意味に関わりなく、シャル形式(5段動詞・a-Qsjaru, 1段動詞・saQsjaru, 「する」saQsjaru)しか現れない。例えば、英語がワカラツシャル〈わかる〉、自信がアラツシャル〈ある〉、答えがチガワツシャル〈違う〉、親にニサツシャル〈似る〉の言い方である。ただし「居る」と「来る」についてはゴザルという補充形を用いる。ゴザルのシャル形式ゴザラツシャルも敬意のある形式として存在する。『白山麓昔話集』p.56「高さが三尺ほどもある石の地藏さまがござらっしやる」にみえる。補助動詞～ Chol の尊敬形でも～テゴザルが用いられる。

スンダイノー：イは{ヤ}の異形態。タ、ダのあと/イルになる。ノーは丁寧な文末詞。

- [10m] アー モーハヤ スンダワツチャ  
 アー モーハヤ スンデ オワツチャ  
 ああ、もう すんでしまったよ。  
 ああ、もうすんで おわるところなんだ。

スنداワッチャ：スンデ オワッチャとっているという。ワッチャという終助詞はない。ただ、ここで言っているスンデオワッチャは、オワッチャ=オワル+{ヤ}（(済んで) 終わるのだよ）のル形で未来テンスである。おそらく「かずき桶」を使う作業は済んで返しに来たが、後始末がまだ残っている、だが全体の作業はもうすぐ終わるという状況を{ヤ}のル形/チャ/で表したものであろう。

## p. 142

- [1f] ホーカヨ (アイ) イクラデモ アイチョルモノ ツコーテ  
 ホーカヨ (アイ) イクラデモ アイチョルモノ ツコーテ  
 そうですね。(はい。) いくらでも あいているんですもの。 使って  
 そうですね。(はい。) いくらでも あいているものは、 使って

イクラデモ アイチョルモノ：もとの解釈では、イクラデモは文脈上アイチョル（空いている）を修飾しているのではなく、ツコーテ（使って）に掛かるが、このようなギャップのある修飾関係は短い談話では不自然なことと考えられる。141-8, 142-7 ではイクラデモ ツコーテの連続である。イクラデモとツコーテの間にあるアイチョルモノは、共通語にある「空いているんだもの（理由）」の機能語を用いた句ではなくて、単に「(空いている) 物」の名詞「モノ」であると思われる。そうなれば、それにつながる助詞「は」(ヲ格)が省略されていることになる。(いくらでも空いている物は使って…) なら不自然さはない。

- [2f] クダハレ エーヤ  
クダハリヤ ヨイヤ  
ください。 いいですよ。  
くだされば いいんだ。

クダハレ：クダハリヤと言っているという。次につながる条件表現。

エーヤ：現在の言い方はヨイヤが正しいという。ヤは「のだ」。

- [3m] ア キノドクナ マコトニ アリガト ゴザイマスー  
 ア キノドクナ マコトニ アリガト ゴザイマスー  
 すいません。まことに ありがとう ございます。  
 ありがとう。まことに ありがとう ございます。

キノドクナ：ここでのキノドクナは感謝の意を表す決まり文句。おそらく、〈相手に気を遣わせて申し訳ない〉→〈感謝の意〉の意味の変遷をとげたものだろう。感謝の意を示すキノドクナは〈可哀想〉の意味とは無関係であり、またキノドクナ+名詞のような名詞修飾の機能をもたない。北陸に広く存在する用法。

- [4f] ナニガー アンニャンサー ハヨー スムマシタイノー  
 ナニガー アンニャンシャー ハヨー スムマシタイノー  
 どうしたしまして。あなた(のどころ)は 早く すみましたねえ。  
 どうしたしまして。あんたのとは 早く すんだんですねえ。

ナニガー：「どういたしまして」の決まり文句。感謝のことばの返答。

アンニャンサー：本文注 2)には「m の家の当主の呼び方は伝統的に決まっている。したがって、ここで「アンニャンサ」は m 自身のこと」とある。m 自身は、アンニャと呼ばれるのは確かであるが、「アンニャンサ」という呼称は白峰に存在しない。ここではアンニャンシャーとあっており、構成はアンニャ+ノ+シャーで、「シャー」という〈人た、グループ〉を示す接辞がついたものである。シャーは短くシャともいう。話者の内省では、類似の意味をもつシュー〈衆〉と比べると多少ぞんざいな言い方だという（例、アンニャノ（～ン）シャー、マンジ（屋号）ノシャーなど）。1, 2 人称の人称詞には付かない（×ギラシャー、×ワレシャー）。長さの短い親族名詞にはノ（ン）なしでも接続する（例、トッサシャー、カーシャーなど）。シュー〈衆〉も同じ名詞に接続する。「ぼかしのラ」とも共存するが、シューとシャーは付き方が異なる。カーラシュー、カーシューラ、そしてカーラシャーは可能だが、×カーシャーラは作れないという。シュー、シャー、ラの意味とそれらの関係について更なる分析が必要である。

- [5m] オー ナカナカ ハリガ デカイデー (ソーカ) ヨー  
 オー ナカナカ ハリガ デカイデー (ソーカ) ヨー  
 そう。なかなか 面積が 大きいので、(そうですか。) ずっと  
 そう。なかなか 面積が 大きいので、(そうか。) たっぶり

ハリ：〈面積〉。嵩や重さなどの他の量には使えない。～ガアル、～ガデカイ、～ガヒロイのように使う。

反意語はハリガナイ、ハリガスクニャ〈少ない〉。

ヨー：ヨー バンゲマデ カカッテのように予想以上に時間がかかったり、規模が大きかったりしたとき使われる副詞。ヨーは、共通語「よく働いた」の〈十分に〉、「よく行く」の〈頻繁に〉と同様の意味の他に、〈予想の基準を上回って、思いがけず〉の意味がある。

デカイデー：理由を表すデが用いられている。「ので」に変化する前の語と見なされている。理由を述べる場合はサカイもあるが、デは主節で述べる事柄の具体的な事由をいうときに使われる。山下鉦次郎氏の「牛首の挨拶」に「イエのざしきはセービャ（狭い）デ、女の人ラはいれませんデ、ずっと奥へつめて下され。」（『白峰村史下巻』p.284）の例がある。デの他の例、146-5 イツテクッデー ソレイッショー イレトイテ クダハレノーも参照。これらの場合、サカイも使用できるが、サカイは、サカイで述べられた事が、主節の事態の単なるきっかけに過ぎない場合に多く使われるようだ。サカイについては 146-6 ココエ イレテ オイトクサカイ モッテッテ、また 151-4,5 トッショリノ コッチャサカイ ムリモ ゴザランケツトノーを参照。デ節は英語の because で訳せるが、サカイ節は必ずしもそうではない。

- [6m] バンゲマデ カカッテ ヤット イマニ ナリマシタヤトコト  
 バンゲマデ カカッテ ヤット イマニ ナリマシタヤトコト  
 夕方まで かかって ようやく いまに なったというわけです。  
 夕方まで かかって ようやく いまになったというわけです。

バンゲマデ：バンゲは夕のこと。アサギリ〈朝、日の出後〉、ヒリマ・ヒンマ〈正午〉、バンゲ〈夕、日の入後〉。対応する食事はアサイ〈朝飯〉、ヒリ〈昼飯〉、ヨケ〈夕飯〉。〈間食〉はコビル。午前はヒ

ンママエ、午後はヒンマカラ（これで一語）というヒンマ（正午）を中心とした複合語で現れる。就寝後の非活動時はヨサリ。ヨナベをするのは活動時であるため夜遅くなったとしてもバングである。夜全体をさす語としては、今日の日中からみた今日の夜はコイベ、次の日からみた前の夜はヨンベである。夜、夕についてはヨサマ、バングサマというサマ（様子）がつく語がある。例えばヨイヨサマは（晴れている夜の様子）を指し、明るく日の天気と言及するときによく使われる。

ナリマシタヤトコト：トコトは「～ということ」で、体言止め的一种。これまでのいきさつを述べる。

150-9, 前稿 p.46, 130-2 も参照。

- [7f] ソリャ イクラデモ ツコーテ クダハリ イリマセンジャサカイ  
ソリャ イクラデモ ツコーテ クダハレ イリマセンジャサカイ  
それは いくらでも 使ってください、いりませんから。  
それは いくらでも 使ってください、(今は)いらな**い**んですから。

クダハレ：クダサレがもと。s>hの変化。

イリマセンジャサカイ：ジャは{ヤ}（のだ）の異形態。マスの後につく。共通語で「いりません」と「いら**な**いのです」の関係が、白峰方言ではイリマセンとイリマセンジャとなる。

- [8m] アイ ソリャ マー アリガトー ゴザイマスワイ マタ ナンカ  
アイ ソリャ マー アリガトー ゴザイマスワイ マタ ジャンカ  
はい。それは ありがとう ございますよ。また なにか  
はい。それは ありがとう ございます。また どうか

- [9m] タノミマスワイノー  
タノミマスワイノー  
お願いしますよ。  
お願いしますよ。

- [10f] ハイ イクラデモ モッテッテ ツコーテ クダハイマセー  
ハイ イクラデモ モッテッテ ツコーテ クダハイマセー  
はい いくらでも 持って行って 使ってくださいませ。  
はい いくらでも 持って行って 使ってくださいませ。

**p. 143**

- [1m] ハイ アリガト ゴザイマシター  
ハイ アリガト ゴザイマシター  
はい、ありがとう ございました。  
はい、ありがとう ございました。

◆3 道で

- [2m] ヤートロ オツカー ナガイコト メーナンダガ ドコイ  
ヤートロ オツカー ナガイコト メーナンダガ ドコエ  
やあ おばさん 長いこと 会わなかったが、 どこへ

やあ 奥さん 長いこと 姿を見せなかったが、どこへ

ヤートロ：驚いたとき使う感嘆詞。ヤア+オトロシの縮まった形か。

オッカー：大人の婦人を呼ぶときの普通の語。大人の男はトッサ。

メーナンダガ：メールは〈姿を見せる、現れる〉の意味。ミエルから。過去否定形はメーナンダとなる。

[3m] イッチョッタナー

イッチョッタナー

行っていたんだい。

行っていたんだ。

イッチョッタナー：ナーは疑問語疑問文で用いられる文末詞。疑問語（どこ、何、どう等）…述語+～ナーの形式をとる。一方、真偽疑問文では～コー、～カーが用いられる。因みにナー、コー、カーのアクセントは全て低く付く。ナーと似た形式にナラがある。『白山麓昔話集』p.22「つぎに下田原、われがとこ〈おまえの所〉に何があるなら」、同 p.34「一体、じゃアして、きゃアなひどいアヤマチ〈怪我〉をしたなら」、同 p.93「佐保、わりや鶉ヶ谷（トーガダン）へ何しいに行つて来たなら」とあり、これらは疑問語疑問文に用いられている。先のナーはこのナラからできたものであろう。おそらく、ナラの前の形はナラムで、ナラム > ナラ > ナーの変化が考えられる。この場合のナラムは「断定のナリ」+「推量のム」で、現在のノダロウに近く、疑問語疑問文では「疑問語+～んだらう？」の意味を持っていたと想像される。疑問文のマーカ「ナー」はこの意味も受け継いだものである。

[4f] ギラーカ（オー） ギラー アノ ヤマー イッチョツテ  
 ギラーカ（オー） ギラー アノ ヤマー イッチョツテ  
 わたしですか。（そう。）わたしは 山へ 行っていて  
 わたしか。（おお。） わたしは 山へ 行っていて

ギラーカ：長音が出ている。この文は短いが白蜂の強調形式の現れとみる。前稿 p.53,134-5, 前稿 p.59,137-6を参照。

ヤマー イッチョツテ：かつての白蜂では「出作り」による焼き畑農業が行われていた。冬季は村（ジゲ）に下りてくる「季節出作り」と、年間をとおして山にいる「永久出作り」があり、ここでは「季節出作り」によってジゲにはいなかったことをさしているのだろう。

[5f] ナーガイコト デテコナンダヤワー

ナーガイコト デテコナンダヤワイ

長いこと 出て来なかったのですよ。

長いこと 出て来なかったんだよ。

ナーガイコト：語幹の長い形が現れているが、白蜂の形容詞本来のもの。ナーギャコトともいう。

デテコナンダヤワー：デテコナンダ+ヤ+ワイの構成。ノダ形「ヤ」、文末詞ワイ。

[6m] サンジャワ シランガ コナイダヤラジュー モ メーナンダツケ  
 サンジャワ シランガ コナイダヤラジュー モ メーナンダツケ

そうだとは 知らないが、この間からずっと 会わなかったねえ。

そうだとは 知らないが、この前あたりから ずっと 姿をみせなかったつけ。

サンジャワ シランガ：〈そうだとは知らないが〉の意味。共通語にある引用のトがここでは見られない。

用言終止形の体言用法の一種とみる。

メーナンダック：東日本でみられる「ケ」が白峰にもある。小林隆（2004:465-514）では、さらに種子島方言のケル（ケラー）の記述がある。これらは古語「けり」に由来するというのが通説。『方言文法全国地図』第3集 141 図、第4集 186, 188 図をまとめた小林（2004:491）の図1に白峰を加えるとケの境界は少し西へ移動する。白峰ではケの前に促音が入る。動詞・形容詞の終止形に直接付くほか、{ヤ} ッケ（/ヤッケ/, /ジャッケ/, /チャッケ/）のノダ形にも付く。タ形+ッケの形が多く出るが、他にル形、チョル形、チョッタ形に出現することからテンスのマーカ―ではないという見通しである。用法は渋谷勝己（1999）でいう「記憶の検索による思い出し」の他、「報告」の用法もある。例えば、兄の様子を見てきた弟が母親に報告する文、アンサワ ベンキョー シチョルック（現在の様子の報告）、シチョッタッカー（過去の時点に見たことの報告）が可能である。主体が話し手自身で、時間があまり経過していない「新しいできごとの思い出し」については非文になる。これは小林（2004:497）の仙台市方言と同じである。例えば、\*ギラワ キョー クサカリ シタック〈私は今日草刈りした〉。キョーをキノー（昨日）に換えると可能な状況になる。書かれた用例では、『白山麓昔話集』p.117「婆、食わんさかいじゃつけ。なんちゆう、あつたら（もったいない）ことしたなア」、p.118「いや、爺ア（ノノア）、わりや食わんさかいじゃつけ」の例がある。～サカイジャツケは「おまえが～だからじゃ」という状況の責任を相手のせいにする言い方で、話者の親の世代でよく用いられたという。広い意味での「思い出し」の一種で、現在の事態（引用の昔話では、団子が鼠の穴に入ってしまった事態）に至った原因を、「記憶を検索して」断言しているといえる。

[7f] ア トッサー ナンシン ゴザツタナー

ア トッサー ナンシン ゴザツタナー

ああ おじさん、何の用で いらっしゃったんですか。

ああ ご主人、何の用で いらっしゃったんですか。

[8m] イマ ココエ ナンジャ チョコット ヨーガ アツテ ウロウロト

イマ ココエ ナンジャ チョコット ヨーガ アツテ ウロウロト

いま ここへ なんですよ、ちょっと 用事が あって ぶらぶらと

いま ここへ なんですよ、ちょっと 用事が あって ぶらぶらと

ウロウロト：ここでは文脈から〈あてもなく〉とか〈ぶらぶらと〉に近い意味。『日葡辞書』にも Vrovroto の記載がある（『邦訳日葡辞書』p.733）。ただしそこでの意味は〈粗忽に大急ぎでするさま〉で一致しない。

[9m] アルイテキテジャ

アルイテキテジャ

歩いて来たんですよ。

## 歩いて来たんだよ。

アルイテキテジャ：ジャ，すなわち {ヤ} (/ヤ/, /イ/, /ジャ/, /チャ/) は終止形（連体形）に接続するだけでなく，テ形+ {ヤ} の形もとる。アルイテキタジャと対立する。アルイテキテジャは聞き手のいる場所まで歩いてきたことを示し，それが継続して行われる含意がある。つまりここでは継続相の一種と見なすことができる。一方，～キタジャは当該の場所に到着したことを示し，その後のことがらについての含意がなく，完成相の一種と見なすことができる。『白山麓昔話集』p.63「おいや，人が，ただ，しゃアなこと（この家にはお金があると）言うてじゃ。何も銭ら（銭など）ないじゃわい。」の例は，お金を借りにきた隣の人に対して申し出を断るときに，お金があるという噂を否定するときに使われている。その噂は今ささやかれているという含意があると思われる。～テヤが継続相と解釈されるかどうかは，「内的限界動詞と非内的限界動詞」（工藤真由美 1995）の区別との関わりを検討する必要がある。『白山麓昔話集』p.206に「おいや，さアそれを忘れてしもてじゃわい」の用例がある。頭の足りない少年が目薬を買ってくるように頼まれたが，途中，買ってくる物を忘れてしまい，道すがら関係のない金物屋に入って，自分が何を忘れたか尋ねている場面で言われた文である。内的限界動詞「忘れてしまう」に用いられると，すっかり忘れてしまった，忘れてしまった状態が続いているという意味であろう。ただし，「雪ガ降ッチョッチャ」{降ル+チョル+ヤ}〈降っているんだ〉が主として〈現在降雪中である〉という継続相を示すのに対して，「雪ガ降ッテヤ」はもっぱら〈雪が積もっている〉という結果相を示すという。また，「ジーサンワ 寝テヤ」の例も結果相を示す。動詞の意味に内在する「内的限界」との関連はなおの精査が必要である。結果相で使われる～テヤは，その結果が現在に何らかの影響をもたらすニュアンスがある，という話者の内省もある。

## p. 144

- [1f] サンカ（オー）ヘット ヤスンデイカッシャレヨー  
 サンカ（オー）ヘット ヤスンデイカッシャレヨー  
そうですか。（うん。）少し 休んでおいでなさいよ。  
そうか。（うん。）少し 休んでおいでなさいよ。
- [2m] イヤ アリガトー ゴザリマスー  
 イヤ アリガトー ゴザリマスー  
 いや，ありがとう ございます。  
 いや，ありがとう ございます。
- [3f] マタ イクヤノ ヤマエ  
 マタ イクヤノ ヤマエ  
 また 行くんですか， 山へ。  
 また 行くのか， 山へ。

イクヤノ：この文はマタ ヤマエ イクヤノの倒置した形をとる。ヤノは真偽疑問文に用いられるマーカー。話者にとってヤコの方が普通で，ヤノは古い言い方だという。145-6 ヨイヤナーで出るヤナーより丁寧だという。

- [4m] ア コレカラ マー マタ イソガシサカイ  
 ア コレカラ マー マタ イソガシサカイ  
 これから また 忙しいから  
 これから また 用事があるから

イソガシサカイ：早口で、サの子音が[θ]であるため、聞きづらいがこれで正しいという。

- [5m] カエツテミンナルマイジャ  
 カエツテミンナルマイジャ  
 帰ってみなければなるまいよ。  
 帰ってみなければなるまいよ。

カエツテミンナルマイジャ：帰って+見+ヌ（否定）+成る（許される）+マイ（否定推量）の構成。（帰ってみないことが許されないだろう）→（帰ってみなければならない）の意味の変遷であろう。

- [6f] サンカ（アイ）マ スズカニ イカッシャレ  
 サンカ（アイ）マ スズカニ イカッシャレ  
そうですか。（はい。）静かに おいでなさい。  
そうか。（はい。）あわてないで おいでなさい。

スズカニ：本文注1)に「急がないで」の意」とあり、これで正しい。

- [7m] アイ  
 アイ  
 はい。  
 はい。

#### ◆4 買物

- [8m] マイド アリガトー ゴザッテノー  
 マイド アリガトー ゴザッテノー  
 毎度 ありがとう ございます。  
 いつも ありがとう ございます。

- [9f] アイ ヤスマツシャレ  
 アイ ヤスマツシャレ  
 はい、お休みなさい。  
 はい、お休みなさい。

ヤスマツシャレ：昔の店先には客が腰掛ける床几のようなものがあったのだろう。

#### p. 145

- [1m] サケ ウツテ クダハレー  
 サケ ウツテ クダハレー  
 酒を 売って ください。  
 酒を 売って ください。

- [2f] イクラホド アゲマショー  
 イクラホド アゲマショー  
 どのくらい さしあげましょうか。  
 どのくらい あげましょう。

- [3m] サンゴーホド タノムマサー  
 サンゴーホド タノムマサー  
 3合ほど 頼みます。  
 3合ほど 頼みます。

- [4f] サンゴー  
 サンゴー  
3合ですか。  
3合。

- [5m] オー  
 オー  
 はい。  
 はい。

- [6f] サンゴークライデ ヨイヤナー  
 サンゴークライデ ヨイヤナー  
 3合ぐらいで いいですか。  
 (たった)3合ぐらいで いいのか。

ヨイヤナー：ヤナーは真偽疑問文で用いられるマーカー。ノダ形の疑問形式である。〈～のか〉の意味。

疑問語疑問文で用いると非文になる。例えば \*ドコ行クヤナー。正しくはドコ行クヤコー。ヤコーは疑問語疑問文のノダ形の疑問形式であり、〈～のか〉の意味。上記ヤナーは 144-3 のヤノよりぞんざいな言い方だという。

- [7m] サンゴークライデ ヨカローダイ  
 サンゴークライデ ヨカローザイ  
 3合ぐらいで いいだろう。  
 3合ぐらいで いいんじゃないか。

ヨカローダイ：～ダイという文末詞はない。ヨカローザイと言っている。〈～じゃないか〉の確認の意味。

ザイの例、前稿の 126-9 「マダ スモークライ アローザイ」、本稿 152-6 を参照。他に『白山麓昔話集』p.26 「いいや、終(しま)いのとこにシ(死)ナンって書いてあるざい」、同 p.138 「われが手じゃって、なお毛だらけじゃざい。しゃアな手で丸けりゃ毛だらけになって、なおか食えまいざい」。  
 ザイの古い形はザレだったと思われる。「言う」に接続したザレの例では同 p.24 「それ、お前らも、やっぱブネって言うざれ(言うじゃないか)」、同 p.102 「ほれ、ほれ、いらんって言うざれ」。ザレは否定の助動詞「ざり」の已然形であろう。係助詞コソが消滅し、結びザレがのちにザイに変化した

と考えられる。

- [8f] ヨー ナイ マンダ ソリヤ ゴンゴモ イッショーモ  
 ヨーナイ マンダ ソリヤ ゴンゴモ イッショーモ  
 よくない。まだ それでは 5合も 1升も  
 よくない。 まだ それは 5合も 1升も

- [9f] モッテカンナン  
 モッテカンナン  
 持って行かなければならない。  
 持って行かなければならない。

モッテカンナン：本文注 1)に「持って行くことになるだろう」の意」と「予想」の意味をあてているが、  
 正しくない。持ッテ+行カ+ヌ〈否定〉+ナラヌ〈許されない〉から来ていると思われる。〈～しな  
 いことが許されない〉→〈～しなければならない〉の二重否定で「義務」を表す。

- [10m] サンナラ セ イッショ クダハイ  
シャンナラ ギラ イッショ クダハレ  
 それでは 1升 ください。  
そうなら 私に 1升 ください。

クダハイ：クダハレと言っている。

p. 146

- [1f] モッテイカッシャッテ クダハレ イクラデモ  
 モッテ イカッシャッテ クダハレ イクラデモ  
持って行って ください いくらでも  
持ってお行きになって ください いくらでも

- [2m] アイ イッショ タノムマスー  
 アイ イッショ タノンマスー  
 はい、1升 頼みますよ。  
 はい、1升 頼みます。

- [3f] アイ モッテイッテ クダハリマセノー  
 アイ モッテイッテ クダハリマセ ノー  
 はい、持って行って くださいませ。  
 はい、持って行って くださいませ。

- [4m] ギララ チョットニヤ (ア) コノ オクニ ヨーガ アツテ  
 ギララ チョットニヤ (ア) コノ オクニ ヨーガ アツテ  
わたしたちは ちよつとね この 奥に 用事が あつて  
わたし ちよつとね この 奥に 用事が あつて

ギララ：このギララはおそらく複数ではなく、「ぼかしのラ」の一種であろう。前稿 pp.35-36 を参照。

コノ オクニ：白峰は、ほぼ南から北に流れる手取川（牛首川）に面した細長い集落である。集落の中心から集落南部分をミナバン（南番）、北部分をキタバン（北番）という。オクというのは、川上のミナバンの端を指すという。因みに下流の桑島（嶋村）方面をシモ（ノカタ）、上流の河内・三つ谷方面をカミ（ノカタ）といい、河岸段丘で崖になっている川の方向をハマ（ノカタ）という。

[5m] イッテクッデー ソレ イッショー イレトイテ クダハレノー  
 イッテクッデー ソレ イッショー イレトイテ クダハレノー  
 行ってくるから それに 1升 入れておいて くださいよ。  
 行ってくるので それに 1升 入れておいて くださいよ。

イッテクッデー：理由を表すデが用いられている。ここではクルのルが促音に変わる。主節で述べる事柄の具体的な事由をいうときデが使われる。サカイは、主節の事柄の単なるきっかけを表す場面に多く使われるようだ。上記デの文と、次の 146-6 ココエ イレテ オイトクサカイ モッテッテ クダハリマセノーと対比されたし。デについては本稿 142-5 も参照。

[6f] アー ココエ イレテオイトクサカイ モッテッテ クダハリマセノー  
 アー ココエ イレテ オイトクサカイ モッテッテ クダハリマセノー  
 ああ、ここへ 入れておきますから 持って行って くださいませ。  
 ああ、ここへ 入れて おきますから 持って行って くださいね。

[7m] アイ ソリヤ ウリシャ  
 アイ ソリヤ ウリシャ  
 はい、それは ありがたい。  
 はい、それは ありがたいことだ。

[8f] オー  
 オー  
 はい。  
 はい。

オー：白峰の比較的くつろいだ場面の返事はオーである。男女とも使用する。

[9m] イッテキマスエー  
イッテキマショイ  
 行ってきますよ。  
 行ってきます。

イッテキマスエ：イッテキマショイといっている。この方言のあいさつ「行ってきます」の決まり文句。

[10f] アイ イッテ ゴザレ  
 アイ イッテ ゴザレ  
 はい。行って いらっしやい。  
 はい。いってらっしやい。

イッテ ゴザレ：あいさつことば「いってらっしやい」の決まり文句。「行って来い」の敬語形にあたる。

「来る」の部分の命令形ゴザレを用いて、イッテゴザレとなる。

**p. 147**

◆5 送り

- [1m] サ キョーワ ツルギニ アノ アノヨーデ イッテクルワ  
 サ キョーワ ツルギニ アノ アノヨーデ イッテクルワ  
 きょうは 鶴来に 例の用で 行って来るよ。  
 きょうは 鶴来に あの用で 行って来るよ。

ツルギ：白峰の北方，直線距離で 30km の地点にある白山市鶴来町（旧石川郡鶴来町）。手取川が山間部から平野部に出たところに位置する。家具屋，造り酒屋など多くの商店があり，大きな買い物は鶴来まで出た（福井県側の勝山にも行くことがあった）。加賀一宮である白山比咩神社があり，県立鶴来高校は白峰から最短距離にある高校で，現在は比較的大きな病院もある。

- [2f] イッテクツチャカ（オー）ソナナラ イッタ ツイデニ  
 イッテクツチャカ（オー）サンナラ イッタ ツイデニ  
 行って来ますか。（うん。）それでは 行った ついでに  
 行って来るのか。（うん。）それでは 行った ついでに

イッテクツチャカ：行ッテ+来ル+ヤカ。{ヤカ}の異形態/チャカ/はノダ形の「のか」に対応する。

ソナナラ：指示詞ソ系はサーナ，シャーナ，サンナラ，シャンナラのサ，シャの音をもつ。

- [3f] ナンカ コーテキテクレヤレ  
 ナンカ コーテキテクレヤレ  
 なにか 買ってきてください。  
 なにか 買ってきてくれ。

クレヤレ：クレヤルの命令形。意味はクレルと同じだが（148-3を参照），現在はほとんど使われないう。昔は使っていたのを知っているが，クレヤレという形しか聞かなかったという。親しい間柄のみに使用。

- [4m] ナニ コーテコニヤ  
 ナニ コーテコ ニヤ  
 なにを 買って来ようかね。  
 なにを 買って来ようかね。

コーテコ：コーテは〈買って〉，コは〈来る〉の意志形。コは助動詞ムが変化したウが接続した「来う」から生じたものだが，「来よう」のようなヨウの発達は見られない。コーと長い場合もある。

- [5f] ニヤー サバノ ニサンボンモ コーテキテクレ  
 ニヤー サバノ ニサンボンモ コーテキテクレ  
 ねえ，さば[鯖]を 2, 3本も 買って来てください。  
 では，さば[鯖]を 2, 3本も 買って来てくれ。

- [6m] サバデ イエーゴ

## サバデ ヨイコ

さばで いいか。

さばで いいか。

イエーゴ：録音はエーコにも聞こえるが、この方言ではヨイコの形であるという。

[7f] ヨーイニヤ

ヨイニヤ

いいですよ。

いいよ。

[8m] ヘー ソナラ メーニ マ アタラ コーテクルシー シゴトガヘー シャンナラ メーニ マ アタリヤ コーテクルシー シゴトガ

それでは 目に 当たったら 買って来るし、仕事が

それでは 目に 当たったら 買って来るし、仕事が

メーニ アタラ：メーニ アタリヤと言っている。「目にあたる」は本文注 2)に「見つかったら」ということ」とあり、この意味で正しいだろう。

[9m] インガシケラ コーテコラレンゾーインガシケリヤ コーテコラレンゾー

忙しければ 買って来れないぞ。

忙しければ 買って来れないぞ。

コーテコラレンゾー：現在でもいわゆるラ抜きのコレンよりコラレンの方が一般的。

## p. 148

[1f] ソレマデシテ インガシケラ ジャンマイシ (オー) オーソレマデシテ インガシケリヤ ジャンマイシ (オー) オーそんなに 忙しければ しかたがありません。(うん) ああそれほど 忙しければ(買わなくても)かまわないし。(うん) ああ

ソレマデシテ：シテは間投助詞。(する)の意味はなく、「それまでして(無理して)」の意味ではない。

ジャンマイシ：ジャンマイは(かまわない、差し支えない)の意味。129-7 ジャーデモ ジャンマイワイ(どうでもかまわないよ)を参照。

[2f] マ アノ コレワト オモワン モンガ アッタラマ アノ コレワト オマウ モンガ アッタラ

これはと 思う ものが あったら

これはと 思う ものが あったら

オモワン：オマウと言っている。白峰では「思う」の終止形はオマウ。テ形(以下タ形でも事情は同じ)はオモテである(オが落ちてモテの場合もある)。これと同じ音便をもつものに、ウトテ(歌って)、シモテ(しまって)、ツコテ(使って)、モロテ(もらって)等があり、これらの終止形 utau, simau の末尾 au に引かれて、終止形「思う」に omau という形が形成されたと考えられる。この逆形成は

開合の区別がない状態でなされた。というのは、「思う」のテ形オモテはomoute > omote > omote の「合音」オーを含んでいたものであり、ウトテ、シモテ、ツコテ、ムコテ等はutaute > utote > utote の「開音」のオーを含んでいたものに由来するからである。開合の区別がなくなり、ともに短音化した。川本（1983:352）では、加賀市大聖寺方言のオマウについての史的な説明がなされている。筆者の説明とは異なり、連用形（音便形）が同一になることへの言及はなく、ハ行5段活用のチガウ、モラウ等がオ段長音のチゴー、モローから生じるときに、オモーもオマウと「誤まれる回帰」をしたとする。しかし、白峰においてチゴー>チガウ、モロー>モラウの“正規の”回帰があったかは不明である。筆者の説明は、そうした終止形の通時的な回帰変化を前提としなくても、終止形テ形・タ形の共時的な交替現象を用いるだけで成立するものである。

- [3f]      コーテキテクレヨ  
             コーテキテクレヨ  
             買って来てくださいよ  
             買ってきてくれよ

クレヨ：この方言のクレルは視点制約のない用法をもつ。ワレが（2人称）ギラに（1人称）土産をクレル、ギラがワレに土産をクレル、友達（3人称）がギラに土産をクレル、ギラが友達に土産をクレルなど視点に制約はない。『白山麓昔話集』p.30「また、あの狐めにだまされちよる、気の毒なと思て目を覚ましてくれたいとお（やったんだって）」、同p.120「何もくれるものはないけつとか、これを礼にあげましよう」の例は（やる、あげる）の意味である。本文のクレヨは命令形クレに終助詞ヨがついたものである。クレルの意志形はクリヨで、クレヨではない。

- [4m]      オー ホンナラ アノ マーガ アッタラ コーテクルサカイ  
             オー ハンナラ アノ マーガ アッタラ コーテクルサカイ  
             ああ、それでは あの 暇が あったら 買って来るから。  
             ああ、それでは あの 暇が あったら 買って来るから。

- [5f]      オー  
             オー  
             ええ。  
             ええ。

- [6m]      ア マッチョツテクレ  
             ア マッチョツテクレ  
             ああ、待っててくれ  
             ああ、待っててくれ

- [7f]      コーテキクダサレ  
             コーテキクダサレ  
             買って来てください。  
             買って来てください。

[8m] アイ サイジャ イツテキマスー

アイ ソイジャ イツテキマスー

はい。それでは 行って来ます。

はい。それでは 行って来ます。

[9f] イツテゴザレ テケンナイヨーニシテ

イツテゴザレ テケンナイヨーニシテ

行っておいで、病気になるないようにして。

行ってきてください、病気になるないようにして。

テケンナイヨーニシテ:テケニャは〈病気であること、気分が良くないこと〉。テケンナイはその反意語。

出かけるさいに病気になるように願うのは大げさに聞こえるが、ここでは、一・二泊の泊まりの旅を想定していることばと思われる。白峰と鶴来の距離は 40km 近くあり、徒歩では日帰りはできない。

[10m] アイ

アイ

はい。

はい。

**p. 149**

◆ 6 迎え

[1m] オッカー イマ カエツテキター

オッカー イマ カエツテキター

かあさん、いま 帰って来たよ。

かあさん、いま 帰って来たよ。

[2f] ン サンカ (オー) モドツテコラレタコー

ン シャンカ (オー) モドツテコラレタコー

ああ そうですか。(うん。) もどっていらっしやいましたか。

ああ そうか。(うん。) もどって来ることができたか。

モドツテコラレタコー:ここでのコラレルは尊敬ではなく可能の意味であろう。というのは、この方言の敬語はもっぱらシャル・サッシャルの形式が用いられ、レル・ラレル敬語は極めて新しいからである。長い道中を旅した労いのことば。

[3m] モドツテキター

モドツテキター

もどって来た。

もどって来た。

[4f] フアーイ サバガ アツタナー

ハーイ サバガ アツタナー

はい。さばが ありましたか。

はい。さばが あったか。

アツナー：疑問語疑問文にはナー，真偽疑問文はコー，カーが原則だが，ここではナーがでている。ここのナーは疑問語疑問文専用のナーとは別物である。疑問語疑問文のナーの音調は常に前接部に低く付く（コー，カーも同じ）が，ここのナーは常に高く付くからである。高く付くナーは疑問語疑問文，真偽疑問文の双方で用いられる。丁寧さはなく，親しい仲で用いられる。

- [5m] サバガ アツター  
 サバガ アツター  
 さばが あったよ。  
 さばが あった。

- [6f] ハイ コーテキタコ  
 ハイ コーテキタコ  
 はい。買って来ましたか。  
 はい。買って来たか。

コーテキタコ：コは真偽疑問文のマーク。コーと長くも言う。143-3, 149-4を参照。

- [7m] コーテキタ サンボン コーテキタ  
 コーテキタ サンボン コーテキタ  
 買って来た。3本 買って来た。  
 買って来た。3本 買って来た。
- [8f] ハイ サンナラ ソレーシテ クーヤワ  
 ハイ サンナラ ソレーシテ クーヤワイ  
 はい。それでは それを 食べることにしましょう。  
 はい。それでは それを 食べることにしよう。

ソレーシテ：シテは間投助詞

- [9m] オー マ ニテクレー  
 オー マ ニテクレー  
 うん。まあ 煮ておくれ。  
 うん。まあ 煮てくれ。

ニテクレー：〈煮る〉は北陸地方の方言では，福井県嶺北地方でタクとニル，石川県加賀地方でニル，能登地方でニルの他にタクが見られる。白峰方言ではニル。ご飯を〈炊く〉はタクである。

- [10f] オーイ マー ノ ノクトエコツチャツタイロー  
 オーイ マー ノ ノクトイコツチャツタイロー  
 はい。まあ 暑いことだったでしょう  
 はい。まあ 暑いことだっただろう

ノクトエ：ここのノクトイは〈暑い〉の意味。全国的にみると暑いことを意味するヌクイ系の語は九

州と東北に分かれて分布し、中部には点在する。木部 (2004:14-16) の説では〈暖かい〉から〈暑い〉に意味が転じたものだという。

**p. 150**

[1m] スクトカッター

ノクトカッター

暑かった。

暑かった。

[2f] ヘー オユデモ ハイッテ マー ヤスメヨー

ヘー オユデモ ハイッテ マー ヤスメヨー

お湯にでも はいって お休みなさいよ。

お湯にでも はいって 休めよ。

ヤスメヨー：夫に対する指示で、ヤスム〈休む〉の命令形が直接に用いられている。妻→夫でも敬語なしの動詞の形式が普通である。ただし、ここでは文末詞ヨーに丁寧さがみられる。

[3m] オー サイセオ

オー シャーショー

うん そうしよう。

うん そうしよう。

サイセオ：この形式はない。シャーショーと言っているという。ショーはシル〈する〉の意志形、シヨウのかたちではない。

[4f] オー

オー

ええ。

ええ。

オー：女性が使っているがオーは最も普通の返事。

◆7 不祝儀

[5m] マイド アリガトー ゴザッテ

マイド アリガトー ゴザッテ

毎度 ありがとう ございます。

いつも ありがとう ございます。

[6f] アイ マイド アリガトー ゴザイマシテ

アイ マイド アリガトー ゴザイマシテ

はい、毎度 ありがとう ございます。

はい、いつも ありがとう ございます。

[7m] ギラ サキガタニヤ (ハイ) ヒトカラ ナンジャ アノー

ギラ サキガタニヤ (ハイ) ヒトカラ ナンジャ アノー

わたし、先ほど (はい) 人から、 なんですよ、

わたし、先ほど (はい) 人から、 なんですよ、

[8m] ココノ バーサン シナツシャッタ ヲチュウテー (アイ)

ココノ バーサ シナツシャッタ ヲチュウテー (アイ)

ここの おばあさんが なくなられた といって (はい)

ここの おばあさんが なくなられた といって (はい)

バーサン：バーサと言っている。バーサンは白峰に古くからある親族呼称ではない。バーサ（アクセント HHH）はバー（HH）より丁寧（因みにバーHLは〈糞〉の意味）。

シナツシャッタ：シヌのシャル敬語のタ形。〈死ぬ〉には別の語マイルがある。シャル敬語形はマイラッシャル。

[9m] ソシテ ユーテキマシタヤトコト

ソシテ ユーテキマシタヤトコト

知らせて来ましたよ。

(誰かが) 言って来たんですよ。

ユーテキマシタヤトコト：～トコトは「ということ」から。これまでのいきさつを述べる。

[10f] オー イマワ ツイドワ ナシンナリマシテー

オー イマワ ツイドーワ ナシニナリマシテー

そうですか。いまは とうとう なくなりました。

はい。いまは とうとう なくなりました。

ツイドワ：もともとツイドーワと長い母音をもつ。〈とうとう、ついに〉の意味。

ナシンナリマシテー：ナシニナルはナイ〈無い〉のナル形。ここでは〈亡くなる〉の意味で使われているが〈無くなる〉と同じ語形である。140-4 も参照。『白山麓昔話集』(p.94)「だんだん力がなしになつて行くばっかじゃったいとお」でもみられる。

**p. 151**

[1m] アイ ダンダン ハヤ オチカラオトシデ ゴザイマスノー

アイ ダンダン ハヤ オチカラオトシデ ゴザイマスノー

たいそう まあ お力落として ございますねえ。

ますます まあ お力落として ございますねえ。

ダンダン：ダンダンで感謝の意を表す方言もあるが、ここでのダンダンが強めの副詞。

[2f] ハイ アリガトー ゴザイマシテ ハチジューハチモ

ハイ アリガトー ゴザイマシテ ハチジューハチモ

はい。 おりがとう ございます。 88歳にも

はい。 ありがとう ございます。 88歳にも

おりがとう：「ありがとう」の誤植。

[3f] ナッタコツチャサカイシテノー

ナッタコッチャサカイ シテ ノー

なったことですからねえ。

なったことだからねえ。

シテ：ここでのシテは間投助詞。

[4m] ア ソーデ ゴザル (モー) マ トツシヨリノコッチャサカイ

ア ソーデ ゴザル (モー) マ トツシヨリノコッチャサカイ

ああ そうです。 (もう。) まあ 年寄りのことですから、

ああ そうです。 (もう。) まあ 年寄りのことだから、

ソーデ ゴザル：～デ ゴザルは～ヤの丁寧語。ゴザルはもともと「いる」「ある」の存在動詞の敬語で、

ジャ、ヤが「である」の起源をもつことから、～テ (デ) ゴザルの言い方が対応する。

[5m] ムリモ ゴザランケツドノー

ムリモ ゴザランケツトノー

無理も ありませんがねえ。

無理も ありませんがねえ。

[6f] オ モーシテ シカタガ ゴザランワイ

オ モー シテ シカタガ ゴザランワイ

はい。何を言っても しかたが ございませんよ。

はい。もう しかたが ございませんよ。

モーシテ：ここでは〈申して〉ではなく、もう (副詞) + シテ (間投助詞) である。シテについては、

前稿 p.39, 126-3, 本稿 148-1, 149-8, 151-3 も参照。

[7m] サンデ ゴザリマス (オー) マー イヤナコツデ

シャンデ ゴザリマス (オー) マー イヤナコツデ

さようで ございます。 まあ ご不幸なことで

そうで ございます。 まあ ご不幸なことで

[8m] ゴザリマスー

ゴザリマスー

ございます

ございます

[9f] アリガトー ゴザリマスー

アリガトー ゴザリマスー

ありがとう ございます

ありがとう ございます

#### ◆ 8 祝儀

[10m] マイド アリガト ゴザッテ

マイド アリガト ゴザッテ

毎度 ありがとう ございます

いつも ありがとう ございます

**p. 152**

[1f] アイ マイド アリガト ゴザイマシテ

アイ マイド アリガト ゴザイマシテ

はい。毎度 ありがとう ございます。

はい。いつも ありがとう ございます。

[2m] キョー ギラニヤー (ハイ) アノ ココノ イネサンナ

キョー ギラニヤー (ハイ) アノ ココノ イネサンナ

きょう わたしはね,                      この 嫁さんが

きょう わたしはね,                      あの この 嫁さんが

イネサンナ: ここでのイネサンは若い嫁をさす。イネとだけいうと、古くは母親をさしていた。母親の意味の他、自分の妻を指すのにも用いられる。前稿 p.57 の 136-6 の注を参照。イネサンナとなるのはイネサンに-a という主格の助詞がついて融合したものであろう。

[3m] ナオッタチューテ ハナシ キーテ (アイ) ホシテ

ナオッタチューテ ハナシ キーテ (アイ) ホンデ

こどもを生んだという 話を 聞いて,                      それで

こどもを生んだという 話を 聞いて,                      それで

ナオッタチューテ: ナオルは〈子を産む〉の意味。

[4m] キテミマシタヤトコト

キテミマシタヤトコト

来てみたところでは。

来てみたというわけです。

[5f] オイヤレ ナオレテ ウリシテノ

オイヤレ ナオレテ ウリシテノ

そうです。生まれて うれしくてね。

そうです。生むことができて うれしくてね。

オイヤレ: 相づちのさいの同意のことば。オイノレと同じ。

ナオレテ: ナオル〈子を産む〉の可能動詞ナオレルのテ形であろう。

[6m] ソシテ オトコノコヤツタツチュタンヤ

ソシテ オトコノコヤツタツチューザイニヤー

そして 男の子だったそうですね。

そして 男の子だったというじゃないか。

オトコノコヤツタツチュタンヤ: ここでは伝聞のツチュー+ザイ〈じゃないか〉の形。

[7f] オノコガ ウマレテ ウリシテ オリマスワノー

オノコガ ウマレテ ウリシテ オリマスワノー

男の子が生まれて 喜んで おりますよ。

男の子が生まれて 喜んで おりますよ。

オノコガ：この方言では〈男〉はオノコが本来。〈女〉はメーロ。152-9を参照。

ウリシテ オリマスワノー：形容詞テ形+オルの形で一時的な状態を示す。本稿 6.2, 前稿 127-4を参照。

[8m] オノコデ メデタイコッチャッタノー

オノコデ メデタイコッチャッタノー

男の子で めでたいことでしたねえ。

男の子で めでたいことでしたねえ。

[9f] オノコデモ メーロデモ ダンナイケツド オナシモンナラ

オノコデモ メーロデモ ジャンナイケツト オナシモンナラ

男の子でも 女の子でも かまわないけれど, 同じことなら

男の子でも 女の子でも かまわないけれど, 同じものなら

[10f] オノコガノー

オノコガノー

男の子がねえ…。

男の子がねえ…。

[11m] サンデ ゴザルー (ウン) オノコヤツテ ヨカッタニヨー

シャンデ ゴザルー (ウン) オノコノコヤツテ ヨカッタニヤー

そうです。 男の子で よかったねえ,

そうです。 男の子で よかったねえ,

オノコヤツテ：オノコノコヤツテと言っている。ヤツテはヤツタのテ形。

**p. 153**

[1m] ホントニ

ホンノニ

ほんとうに。

ほんとうに。

[2f] アリガトー ゴザイマツス

アリガトー ゴザイマス

ありがとう ございます。

ありがとう ございます。

[3m] アイ

アイ

はい。

はい。

## 8 おわりに

日本語の文献学的研究には、写本や版本等の資料一つ一つの検討やそれらの校合を非常に厳密に行う伝統があり、それが日本語史研究の基礎を支え、精密な研究の進展に大いに貢献している。それに比べ、方言談話を記録した資料は十分な検分がなされず、そのまま利用されている現状が一部にはある。NHK 全国方言資料のように音声資料が付属されている場合でも、資料を用いる研究者が事実を確認できる状況になれば、文字化部分をそのまま信じて用いるしかない。方言の比較研究に使用するものは、結局のところ文字資料であり、録音と文字の正確な対応が保証されなければ、研究で実証しようとする事柄の基礎が崩れてしまうことになる。こうした事態は誰でも避けたいと思うであろう。

NHK 全国方言資料は、藤原与一著『日本語方言辞書』など、いくつかの研究で利用されている。録音のほとんどが 50 年以上も前のもので、今では貴重な資料となっている。録音されていることばを、完璧に理解できる人たちが存命である現在、このさい、再調査を前提とした全面的な見直し作業を行ったらどうかと考える。改訂作業自体は地味なものだが、現代の方言学の現状からみて、新しい発見も大いに期待できる。そのときの資料の公表は、PDF のファイルの形式ではなく、タグ情報がついたテキストファイルであれば、利用範囲はさらに広がるだろうと思う。今後、この種の基礎研究が進み、方言研究のコーパスがより充実したものになることを期待したい。

◇ 本研究は、平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究課題番号 16520275「石川県白峰方言の調査研究と方言語彙のデータベース化」(研究代表者：新田哲夫)によって行われた。

## 引用文献

- 岩井隆盛 (1962) 「白峰方言の分布と変化」『白峰村史 上巻』, 白峰村史編集委員会, pp.425-451
- 小倉学編 (1974) 『全国昔話資料集成 4 白山麓昔話集』, 岩崎美術社
- 川本栄一郎 (1979) 「方言」『石川県尾口村村史』第 2 巻 資料編 2, pp.897-933
- 川本栄一郎 (1983) 「石川県の方言」『講座方言学 6 中部地方の方言』, 国書刊行会, pp.337-362
- 木部暢子 (2004) 「鹿児島方言の記録—移動先・とき・暑さを表すことば—」『新しい関係性を求めて』, 鹿児島大学全学プロジェクト報告書, 鹿児島大学, pp.1-17
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間の表現—』, ひつじ書房
- 国立国語研究所編 (1970) 『日本言語地図 第 4 巻』, 大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編 (1989) 『方言文法全国地図 第 1 巻』, 大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編 (1994) 『方言文法全国地図 第 3 巻』, 大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編 (1999) 『方言文法全国地図 第 4 巻』, 大蔵省印刷局

- 小林隆 (2004) 『方言学的日本語史の方法』, ひつじ書房
- 真田信治 (1990) 『地域言語の社会言語学的研究』, 和泉書院
- 真田信治 (2005) 『都道府県別 気持ち伝わる名方言集 141』, 講談社+α新書
- 渋谷勝己 (1999) 「文末詞「ケ」—3つの体系における対照研究—」『近代語研究』10, pp.207-230
- 橋礼吉 (1995) 『白山麓の焼畑農耕—その民俗学的生態誌—』, 白水社
- 土井忠生・森田武・長南実編訳 (1980) 『邦訳 日葡辞書』, 岩波書店
- 中田祝夫・和田利政・北原保雄編 (1983) 『古語大辞典』, 小学館
- 新田哲夫 (2002) 「石川県白峰方言の形容詞—語形とアクセント—」平成 14 年度文部科学省補助金 (特定領域研究) 研究成果報告書, 上野善道編『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究 3』, pp.143-171
- 新田哲夫 (2004) 「NHK 全国方言資料 (石川県石川郡白峰村白峰) 改訂と注釈」『金沢大学文学論集 言語・文学篇』 pp.29-63
- 藤原与一 (1996~1997) 『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—上, 中, 下巻』, 東京堂出版
- 八亀裕美 (2001) 『現代日本語の形容詞述語文』阪大日本語研究 別冊 1, 大阪大学大学院文学研究科日本学講座
- 八亀裕美 (2002) 「《短信》非動的述語の「継続相相当形式」—青森五所川原方言の場合—」『国語学』53-1, pp.131-132
- 八亀裕美 (2003) 「形容詞の評価的な意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』15, pp.13-40